

隣人の家を欲してはならない



大学経済学部経済学科教授
芹田敏夫
SHERITA Toshio

「隣人の家を欲してはならない。隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど隣人のものを一切欲してはならない。」

出エジプト記20章17節

はじめに

私は大学経済学部経済学科に所属し、「ミクロ経済学」や「行動経済学」などの講義を担当しています。専門は金融・ファイナンスで、株式市場などをたくさんのデータを用いて分析しています。

ミクロ経済学の講義の中で、私はいつも市場メカニズムに任せれば価格がうまく調整機能を発揮して需要と供給が一致し、望ましい

「む」となっています。例えば、クレジットカードの利用は、現金に比べて支出が簡単で便利です。企業側も、ポイントが貯まるメリットなどでクレジットカード利用を推奨しています。しかし、現金払いとクレジットカード払いを比べると、クレジットカードの方が余計に多く支出してしまうことがデータ分析から明らかになっています。クレジットカード払いでは油断してつい気軽に多くの支出をしてしまうからです。そのような私たちの癖を企業は巧みに利用して儲けようとするのです。最近流行し始めた「スペイ」などのスマホ決済も同様の問題を抱えており、利用には慎重が必要が必要です。

現代の企業と私たち

また、企業はより魅力的な、しかし、かなり値の張る新しい商品やサービスを世に次々と出しています。既存の商品サービスとの違いはわずかであって価格がかなり高くても、私たちはつい買ってしまう傾向にあります。客観的に見ると私たちは企業に操られて買われている。「カモ」になっっているという面があるのです。購入時には、必要な情報を十分に集めて、落ち着いて、買うべきかどうかの判断をすべきです。特に、一生のうちめったにない高額な買物、例えば自動車や家などの購入には、冷静な判断ができなくなるので注意が必要です。例えば、セー

状態（専門用語では「効率的な資源配分」と呼ぶ）が達成されることを説明しています。このことは、アダム・スミスが「見えざる手」という有名な言葉を用いて示したことです。ただし、このことが成立するためにはいくつかの前提条件が必要です。ここでは、望ましい状態にはいかなことも多いことを示したいと思います。このことは、上に示した旧約聖書の出エジプト記に記されている有名な「モーセの十戒」の第十番目の戒めと関わっているのではないかとこのことについて考えてみたいと思います。

不道徳な見えざる手

最近私が読んで大いに考えさせられた本

ルスマンのトークに乗せられて予算より高額のものを購入して後悔する恐れがあります。その結果、私たちは、いつもお金が足りないという状況にあるのです。日本において、昔よりも所得が上昇しても幸福感が高まっていないという研究結果とも合っています。

一方、新しい商品、サービスを生み出す現代の企業は、私たちの財布の紐が緩むようにさまざまな戦略を用いることによって巨額な利益を獲得し、世界の富を経営者や大株主などの一握りの人々へ集中させています。以上のことから、私たちは、あれも欲しい、これも欲しいという思いが膨らみやすく、それが弱みになっていることを認識し、企業の「カモ」にならないように気をつける必要があるのではないのでしょうか。

モーセの十戒（第十戒）と私たち

このような私たちの問題に対して、神は聖書を通して人間に警告を発しています。先に挙げた聖書の言葉は、有名なモーセの十戒の一つです。モーセの十戒は、旧約聖書に書かれている。たくさん神の教え・戒めの中で、人間が神と人に対して守るべき戒律のエッセンスといえるでしょう。十戒のうち、前半の四つは神との関係、後半の六つは人との関係についての戒めです。

ここで挙げた第十戒は「隣人の家を欲してはならない」と命じています。この言葉は、私た

に、『不道徳な見えざる手』（東洋経済新報社、2017年）があります。著者はジョージ・A・アカロフとロバート・J・シラーで、共にノーベル経済学賞を受賞した著名な経済学者です。この日本語訳のタイトルは、先に述べたアダム・スミスの「見えざる手」にかけたものですが、原題は「Phishing for Phools」（「カモ」をだますの意）となっています。この本のエッセンスは、「自由な市場取引においては、望ましいことも多いが、一方、悪人が悪いことを行う自由もあること、その結果、悪いことを考える企業や人々が私たちの弱みにつけ込むことにより、社会が悪くなることも多い」ということです。副題は「自由市場は人間の弱みにつけ込

ち人間が誰でも持っているむさぼりという心の中に渦巻くさまざまな欲望というものを罪として戒めています。「欲しい」と心の中で思うだけでも駄目なのです。この一つの戒めさえも守ることはできないことを、すなわち私たち人間の罪を実感できるのではないのでしょうか。また、この戒めは、隣人の家、隣人の妻、男女の奴隷、牛、ろばなど、ありとあらゆるものを欲しがらる人間の貪欲さを明らかにしています。私たちは、自分は持つていないが、隣人が持つているさまざまなものを欲しくなるのです。この第十戒は、人間の本性を示し、欲望をたくさん膨らませている現代の私たちにも全く色褪せない大事な言葉であると私は思います。

先に述べたように、現代に生きる私たちは、企業の巧みな戦略によって、私たちが持つさまざまな欲をうまく利用されています。冷静さを失い、もつとあれもこれも欲しいという弱みにつけ込まれ、本当は必要もないものまで余計に買わされているかもしれないことに注意する必要があります。

神は、2000年以上前から聖書を通して、人間の欲望について、誰もが直面する大きな問題として示し、戒めを与えています。この聖書の言葉をじっくり考えていただければ幸いです。

（2019年度大学礼拝における奨励より）